(5)　実践の考察

Ａ、Ｂ、Ｃ校、それぞれの実践について、資質・能力がどのように身に付いたか、考察を行います。なお、新学習指導要領移行期間前であるため、検証授業は現行学習指導要領で評価を行っています。そのため、ここでは試案として新学習指導要領の資質・能力に置き換えて考察を行うこととします。今後、国語科で育成を目指す資質・能力を基に、文部科学省から評価の在り方についても答申が出される見込みです。資質・能力がいかに高まったかという詳細の考察については、答申の内容を踏まえて次年度の研究において行います。

ア　Ａ校（第３学年）の実践の考察

Ａ校の考察では、現行学習指導要領と新学習指導要領を照らし合わせ、資質・能力を以下のように整理して考察を行うことにしました。

現行学習指導要領	新学習指導要領
句読点を適切に打ち、また、段落の始め、会話の部分などの必要な箇所は行を改めて書くことができる。　【言語についての知識・理解・技能】	漢字と仮名を用いた表記、送り仮名の付け方、改行の仕方を理解して文や文章の中で使うとともに、句読点を適切に打つことができる。【知識及び技能】
出来事の中心がよく伝わるように、事柄ごとに段落を組み立てて書くことができる。【書くこと】	書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることができる。【思考力、判断力、表現力等】

〇知識及び技能

・漢字と仮名を用いた表記、送り仮名の付け方、改行の仕方を理解して文や文章の中で使うとともに、句読点を適切に打つこと。

漢字と仮名を用いた表記、送り仮名の付け方については、年間を通して多くの児童が正しく文章の中で使うことができています。これは、日頃から文章を書く際に教師が、既習漢字を必ず使うように指導を継続されていたからだと考えられます（**次頁資料１、２**　**部**）。このような指導を日常的に継続して行うことが「知識及び技能」の高まりにつながると感じました。また、改行の仕方についても、ほぼ全ての児童が適切に処理できていました。書くこと領域において、単元を通した言語活動を位置付けて重点的に指導し、日常の日記等に生かしたことがこの成果につながっていると考えられます（**次頁資料３**）。

○思考力、判断力、表現力等

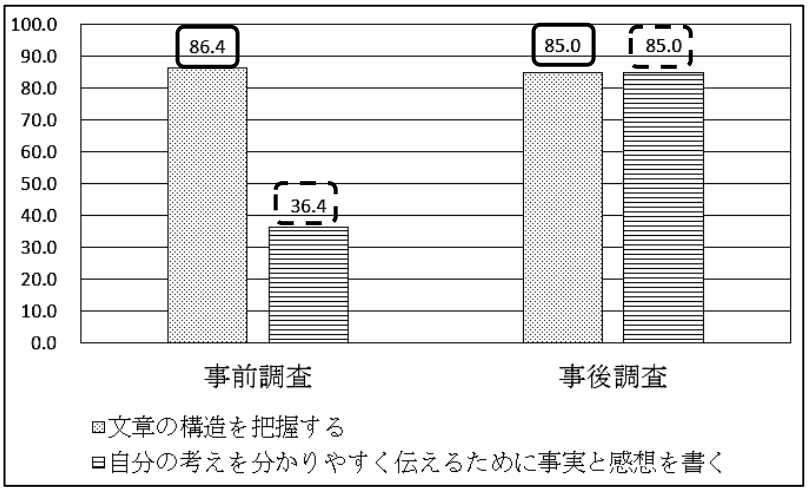
・書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えること。

資料１　４月の日記

資料３
授業で扱った言語活動

資料２　11 月の日記

事前・事後調査を見ると、「文章の構造を把握する」設問では、正答率が 86.4%から 85.0%となっており、高い正答率を保っている（**資料４ □ 部**）ことが分かります。このような結果になった理由として、ある段落に書いてある内容の中心を把握した上で、段落の見出しとつなげることができたからだと考えられます。また、第２学年で学んだ「自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること」が定着しているとも言えます。

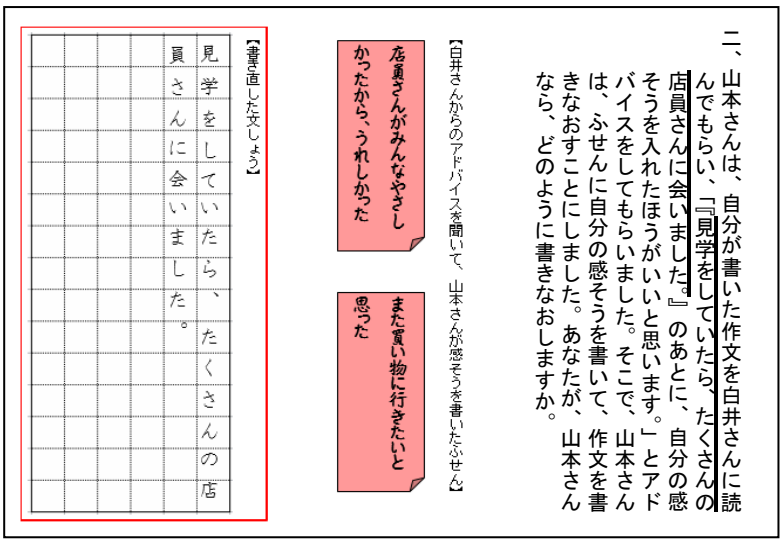


資料４　事前・事後調査の結果

次に、「自分の考えを分かりやすく伝えるために事実と感想を書く」設問（**次頁資料５**）では、事前・事後調査間で大きな変化が見られました（**資料４ ⌐ ¬ 部**）。このように正答率が高まった要因としては、検証授業において、自分が伝えたい事実に感想を付け足し、その時の気持ちを生き生きと表現する学習に取り組んだことが、事後調査と関連性のある内容であったからだと考えられます。また、自

分の伝えたいことの中心を明確にして、段落を考えながら書くことを継続した結果だと考えます。

Ａ校においては、日常的に文章を書く学習を仕組んでいます。季節ごとに思い出を残したり、オリジナルの物語を書いたりと作文に慣れ親しむことが児童の資質能力を高める大きな要因であると感じました。



資料５　事後調査「自分の考えを分かりやすく伝えるために事実と感想を書く」設問

イ　Ｂ校（第２学年）の実践の考察

現行学習指導要領と新学習指導要領を照らし合わせ、資質・能力を以下のように整理して考察を行うことにしました。

現行学習指導要領	新学習指導要領
言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くことができる。　【言語についての知識・理解・技能】	言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くことができる。　【知識及び技能】
互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うことができる。　【話し合うこと】	互いの話に関心を持ち、相手の発言を受けて話をつなぐことができる。　【思考力、判断力、表現力等】

〇知識及び技能

・言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。

検証授業の単元学習後、「上手に話し合うポイント」（自分の考えの理由を述べる、分からないことは質問する、似た考えは１つにまとめる）を用いて話合いを行うことの有用性や意義について、児童が気付くことができたかどうか、振り返りにおける記述内容を整理すると、**資料６**のようになります。

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	○	×	
理由	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	16	4	80%
質問	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	16	4	80%
まとめ	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	15	5	75%
	記述有り:○　　記述なし:×																						

資料6 「上手な話合いのポイント」を用いることの有用性や意義についての記述

理由を挙げた上で、考えを述べることの有用性や意義に関する言及・・・80%
（児童 20 名中 16 名）

〈児童の記述例〉

・「りゆうをつけると、なっとくしてもらえるからいいとおもいます。」
・「りゆうを言ったら、いみが分かってよかったです。りゆうがあるとわかりやすかったです。りゆう（を言うこと）はすごいです。」

→理由を挙げることによって、自分の考えや相手の意図がより明確に伝わることに気付いている。

分からないことへ質問をすることの有用性や意義に関する言及・・・80%
（児童 20 名中 16 名）

〈児童の記述例〉

・しつもんすると、分からないことがこたえられてわかるし、みんなの気もちをうごかすのですごいと思いました。
・しつもんすると、分からないことが分かるからべんりだとおもいました。しつもんすると、心がすっきりしました。なぜかというと、分からないことが分かるからです。

→途中で立ち止まって、言葉の意味や意図を確かめながら話合いを進めることで、互いの考えを深く理解することができることに気付いている。

似ている考えを１つにまとめることの有用性や意義に関する言及・・・75%
（児童 20 名中 15 名）

〈児童の記述例〉

・（にている意見を）がったいすると、すっきりするからいいとおもいます。がったいすると、ごちゃごちゃならないで、おぼえることがすくなくなるからべんりだと思いました。

→似ている考えをまとめることで、互いの考えを整理することの簡便性について気付いている。

検証授業前は、自分の考えに固執するあまり、話合いが行き詰まってしまう場面が多く見られましたが、検証授業の単元学習後は、話合いを円滑に進めようと、似た考えは互いに歩み寄って１つにまとめようとする姿が見られるようになりました。また、他教科の授業でも、考えの理由を挙げて話したり、互いに質問し合ったりする姿が多く見られるようになりました。本単元で、「上手に話し合うポイント」を用いて話合いを行うことの有用性や意義について記述できなかった児童についても、日常生活の中で、このような経験を重ねる中で、少しずつ言語感覚を育成することにつながると考えます。

〇思考力、判断力、表現力等

・互いの話に関心を持ち、相手の発言を受けて話をつなぐこと。

「上手に話合うポイント」（自分の考えの理由を述べる、分からないことは質問する、似た考えは１つにまとめる）を用いて話合いを行うことについて、事前、事後の実態調査（**資料７、８**）を行いました。

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	○	×	－	○
理由	×	○	－	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	－	○	－	－	○	○	○	15	1	4	75%
質問	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	19	1	0	95%
まとめ	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○	×	○	×	×	○	○	○	14	6	0	70%
	正答:○　　誤答:×　　無回答:－																							

資料7　事前実態調査結果

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	○	×	－	○
理由	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	19	1	0	95%
質問	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	19	1	0	95%
まとめ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20	0	0	100%
	正答:○　　誤答:×　　無回答:－																							

資料8　事後実態調査結果

森さんのクラスでは、生活科で作ったおもちゃをつかって、おきゃくさんにあそんでもらう「おもちゃ屋さん」をひらくことにしました。

一、「おもちゃ屋さん」のおきゃくさんとして、①から③のだれかをよぶことになりました。あなたなら、だれをよびたいですか。（　）に、ばんごうをかきましょう。えらんだわけも、話すようにかきましょう。

①一年生　②年長さん　③おうちの人

よびたいのは、（　）です。そのわけは、

資料９　事後調査「自分の考えに理由を付けて話す」設問

事前、事後の実態調査結果を比較すると、「自分の考えの理由を述べる」ことについて、20％の児童の正答率が上がっています。また、「似た考えは１つにまとめる」ことについて、30％の児童の正答率が上がっています。

検証授業後、日常生活の中で、似ている考えをまとめようと児童間で話し合う姿や、理由を基に考えを述べようとする姿が見られるようになっており、資質・能力の向上につながっていると考えることができます。

ウ　Ｃ校（第４学年）の実践の考察

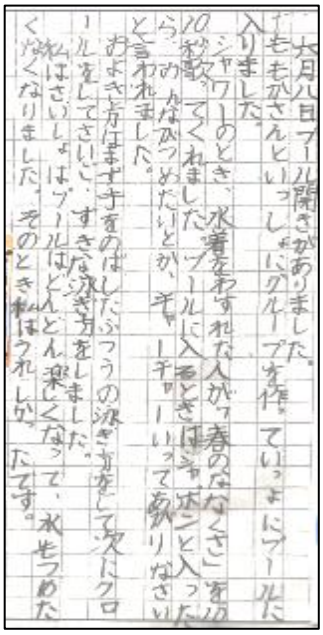
Ｃ校の考察では、現行学習指導要領と新学習指導要領を照らし合わせ、資質・能力を以下のように整理して考察を行うことにしました。

現行学習指導要領	新学習指導要領
句読点を適切に打ち、また、段落の始め、会話の部分などの必要な箇所は行を改めて書くことができる。　【言語についての知識・理解・技能】	漢字と仮名を用いた表記、送り仮名の付け方、改行の仕方を理解して文や文章の中で使うとともに、句読点を適切に打つことができる。【知識及び技能】
相手や目的に応じ、経験したことや調べたことについて、段落の役割を考えながら文章を書いたり、書こうとすることの中心を明確にして見出しを付けたりすることができる。　【書くこと】	段落の役割を考えて内容のまとまりで段落をつくったり、書く内容の中心を明確にして見出しを付けたりすることができる。【思考力、判断力、表現力等】

○知識及び技能

・漢字と仮名を用いた表記、送り仮名の付け方、改行の仕方を理解して文や文章の中で使うとともに、句読点を適切に打つことができる。

単元導入前の児童の実態は、漢字と仮名を用いた表記、送り仮名の付け方について理解が進み、適切に使うことができていました。しかし、改行の仕方については適切ではない児童が多く見受けられました。そこで、思考力、判断力、表現力等での考察に挙げているワークシートを活用しました（**資料 12**）。これにより、段落の内容を意識して書き、そこで改行を要することを理解させることができました。実際の通信では習得した知識及び技能を活用して書くことができていました（**資料 10**）。ただし、本実践は１単元のみで児童の変容を考察しているため、一過性であることが否めません。したがって、今回のような「書くこと」の単元で習得した知識及び技能を、日常の日記や他教科での表現活動に生かし、日常生活及び教科等横断的な指導を継続していく必要があります。

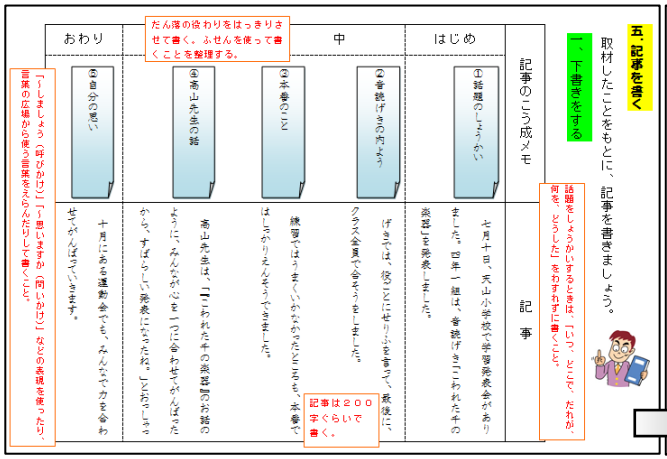


資料 10　通信記事

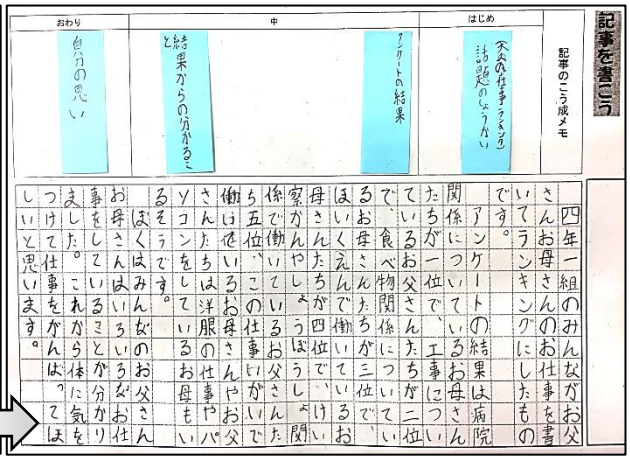
○思考力、判断力、表現力等

・段落の役割を考えて内容のまとまりで段落をつくったり、書く内容の中心を明確にして見出しを付けたりすることができる。

上記の資質・能力を育成するために、記事の書き方を示した手引き（**資料 11**）と手引きに準じたワークシート（**資料 12**）を作成し、児童に活用させました。ワークシートの上段には付箋を貼り、段落に書く内容を設定させました。これによって、児童は付箋の内容から外れることなく書くことの中心を意識して書くことができるようになり、単元後の作文や社会科見学通信でも本単元で学習したことを生かすことができていました。また、書くことの中心を意識して書くことができるようになり，単元後の作文や社会科見学通信でも本単元で学習したことを生かすことができていました。



資料 11　記事の書き方を示した手引き



資料 12　通信記事